

【報 告】

「渡島大島」日本最大の無人島における環境調査（その2）

実施2007年7月－8月

酪農学園大学大学院獣医学研究科「離島の保全医学を研究する UNIT」報告

齊藤 聡、渡邊 秀明、浅川 満彦
(石山通り動物病院、酪農大)

「渡島大島」日本最大の無人島における環境調査
その2

その1では主に渡島大島の植物や地形、捕獲したドブネズミについて説明を行った。その2ではアナウサギと

オオミズナギドリの営巣場所について説明する。

アナウサギは1938年、毛皮採取などを目的として人為的に13頭が放たれたのが最初であるとされている。その後、自家繁殖し島に定着するに至った。江良の古老の話によると1950年頃には1万頭くらいのアナウサギが生息していたらしい。2007年8月現在の生息数はアナウサギの習性や季節、地理的な条件から正確な算定は大変難し



写真14 「ハヤブサに仕留められたアナウサギ」島内調査中に偶然発見したアナウサギの死体。島のウサギはペットと同じアナウサギ種で毛色もさまざまである。大変警戒心が強く捕獲するのは困難である。



写真16 「アナウサギの糞」新しい糞と古い糞が混じり島のどこにでも見られる。場所によっては糞尿の匂いが鼻を突き、相当数の生息が示唆される。



写真15 「アナウサギの巣穴と糞」海岸から山頂まで無制限に掘られた巣穴。多いところでは1㎡あたり200個以上の糞が見られた。



写真17 「オオセグロカモメの巣」切り立った断崖の海拔100mほどの高さにある。すでに雛は巣立ちの後である。

いが、数百から二千頭の範囲ではないかと思われる。実際に海岸線からも多数の糞が認められるが山の斜面から山頂に至るまで多数散在しており、場所によっては糞尿臭が鼻を突くような高密度生息場所もある。アナウサギの移入により固有の自然を壊されている同様の島には熊本県牛深大島や石川県七つ島がある。七つ島は平成15年に環境省から特別保護地区に指定され、現在アナウサギによる植物相の被害を防ぐためにすでに駆除が行われている。しかし渡島大島には平地がなくほとんどが断崖または急斜面で構成されているため、人が追いかけてウサギを捕獲することは困難である。そのためアナウサギ駆除の方法とそれに伴う環境へ与える悪影響について論議せねばならない。

島南端にある東風泊（ヤマセドマリ）では過去の調査でオオミズナギドリが確認されている。本調査でもその周辺を重点的に調べ、20ほどの巣穴を認めたが巣穴



写真18 「オオミズナギドリ繁殖場所」東風泊の断崖上にあるスロープの岩場にかつての大営巣場所がある。ここでも多くのウサギの姿が見られる。

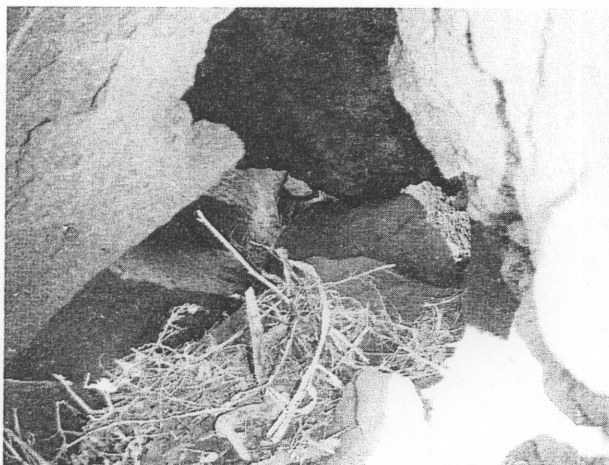


写真19 「オオミズナギドリの巣穴」東風泊斜面、岩の隙間に作られているが奥は見えない。鳥を刺激しない配慮で巣穴の中は調べなかった。

は奥深いため、卵や雛は確認していない。また、巣穴の中には明らかに鳥が利用しているものではなく、アナウサギが住処として占拠し、糞が散在しているものも多くあった。

オオミズナギドリは日中、海上にいるため巣穴への飛来は夕方から夜間にかけてであるが、午後9時までに東風泊の営巣場所への飛来は一羽も確認できなかった。早朝5時頃には北風泊（アイドマリ）にて調査期間中、個体識別不能であるが成鳥7羽の飛翔が確認できた。そのうち6羽はつがいと思われた。

感想

渡島大島のように苛酷な環境にある天然の要害とも言える地において、人為がもたらした自然破壊を目の当たりにした。オオミズナギドリ存亡の受難は始めから人によって引き起こされたものであるが、今後、この島からオオミズナギドリがいなくなることを無きよう保護対策



写真20 「オオミズナギドリ」北風泊で確認された成鳥。



写真21 「危険な崖の調査」垂直に切り立った断崖をザイルに命を託しての探査。背後の海岸は真下に落下すると200mはあるであろう。

を早急に必要であると感じた。

本調査結果を松前町教育委員会および北海道庁自然環境課に報告するが、関係部署から環境省に島の現状を説明し、早急な保全対策の実施を働きかけてもらいたいと思う。

後 記

この島にはおそらく今後も人が住むことは無いであろう。この厳しい環境の中で長い間生息していた生命が、今、まさに滅びようとしていることを一人でも多くの人に知ってほしい。

謝 辞

今回の調査にあたり文化庁の許可にご助力くださった松前町教育委員会文化教育グループ主査前田氏、渡島支庁環境生活課の鍋谷氏、係長小島氏、北海道開発局の宿舎を貸与してくださった函館開発建設部課長今林氏に深謝いたします。なお、本調査における採集業務および寄生虫を除く病原体分析は環境省地球環境研究総合推進費(F-062)、線虫を含む寄生虫学的検討については文部科学省科学研究費(No. 1851020)の助成を受け実施した。

参 考 文 献

- 1) 小城ら：北海道大学水産科学研究報=BULLETIN OF FISHERIES SCIENCE, HOKKAIDO UNIVERSITY, 52(2): 71-93